

## ROLLEI 35

▼ローライ 35(ドイツ製)

■現地価格

DM500(約3万円)

■日本での相場価格

8万5000円

ウェスト・ジャーマニーの  
ローライ35がこの値段で買えた!

私たちがLEON編集長のためにブレーメンのカメラベーゼでゲットしたブラックのローライ35。言い値はDM530だったが値切ったらあっけなく負けた。完動品でまったくの無キズ。ローライ35は初期の少数の西独製とシンガポール製があるが、日本では後者でもこの値段では買えない。



高島鎮雄(全日本クラシックカメラクラブ会長)と訪れるドイツのカメラベーゼ

# 発見! クラシックカメラは 「ドイツ・ノミの市」が安い!

クラシックカメラに興味はあるが、あれは力ネとヒマに余裕のある老人の趣味だ、と漠然と思ってはいないだろうか。しかし実際にはクルマや時計、ガーメントや靴に凝ってしまうよりはずっと安上がりで、しかも写真を撮る楽しみもあり、またカメラを通して友人を作ることもできる。カメラだって、その気になればお気に入りのものを手ごろな価格で入手することも可能だ。その秘訣を明かすため、ドイツ、ブレーメンを訪れた。

文/高島鎮雄 構成・写真/千葉 卍



## LEICA M2

►ライカ M2 ズマロン35mm.  
F2.8. MRメーター付き

■現地価格

DM3480(約21万円)

■日本での相場価格

35万円

ライカはドイツでも高いが、  
それでもこのM2はお買い得だ!

ライカはドイツと日本が高く、モデルによっては日本のほうが安い場合もある。しかしそれでもこのM2はお買い得だった。ボディは新品同様、レンズはドイツ製のズマロン35mm. F2.8. MRメーター付きだから日本ではもっと高いかもしれない。ただしこの店はビタ一文負けない。



たかしま・しげお  
1938年群馬県前橋市出身。CARグラフ  
イック誌創刊に参画。  
元副編集長。父の影響で幼少よりカメラに親しみ、歴史的カ  
メラの収集、研究歴  
30年。夢は私的カ  
メラ博物館の設立。

# 「ドイツの中古カメラ市」とは?

クラシックの名機がキラ星のごとく並ぶ。ドイツのカメラを求めるには、やはりドイツを訪れるのが一番だ。ひとつには世界的にみてもクラシックカメラが比較的の高価な日本に比べ、かなり(ものによっては驚くほど)安く買えるからである。もうひとつは選択肢が極めて豊富だからだ。ドイツの大都市には必ずクラシックカメラを扱う店がふたつや三つはあるが、そのほかにドイツにはフォトベーゼ、あるいはカメラベーゼというものがある。BOERSEと

は財布、株式取引所などで、要するにカメラ取引会のことだ。といっても業者同士のものではなく、一般的なカメラ好きがコレクションカメラや実用機を探しにくる場である。

主催者は体育館や講堂のような広い会場を借りてテーブルを並べ、ひとテーブル幾らとショバ代を取って貸す。業者は全ドイツ、なかには国境の外からクルマにカメラを積んでやってきて、借りたテーブルに所狭しと並べる。扱うのは新旧のカメラばかり



「カメラベーゼ、本日10時から16時まで」という立看板。しかし3時には片づけ始める。

りでなく、レンズや各種アクセサリー、は古いカメラのカタログや本、雑誌にまで及ぶ。大きいものになるとこんな店が実際に350も並ぶのだから、カメラ好きにはたまらない。ひと度足を踏み入れたら二度と出たくない天国、いや地獄である。会期は週末の一日だけだが、春から秋にかけてのシーズンにはほとんど毎週末にドイツのどこかの都市で開かれる。今回訪れたブレーメンは出店61という小規模なものだったが、それでも大混雑であった。



テーブルふたつにガラスケースを置いた立派なお店。値段は高く、ライカM2を負けなかった。



普通はだいたいこんなディスプレー、テーブルにカバーをかけて無造作にカメラやレンズが並べてあるだけだ。



ブレーメンは北海からウェーザー河を遡った河港の街。また「音楽隊」で知られるメルヘン街道の北の始点。



カメラとともに昔のカタログなどを売っている。右は1920年代のフォクトレンダーのもので「7000円!」



**ROBOT ROYAL 36S**

▲ロボット・ローヤル36S クセナー45mm, F2.8付き

■現地価格 DM2900(約17万4000円)

■日本での相場価格 25万円

私の今回の掘出物はこのまっさらのロボット・ローヤル36Sであった

ただしこれはブレーメンのカメラベーゼではなく、ミュンヘンのセカンドハンドカメラで見つけたもの。したがって大して安くはなく、日本でもこのくらいで買えないことはないが、差は未使用に近い。文字どおりの新品同様の保存状態。ロボットはデュッセルドルフのオッター・ベルニング社が1934年に発売。“ロボット”的な名前は、フィルムとシャッターの自動巻き上げを表す。いまでは電気モーターによる自動巻き上げは当たり前だが、ロボットは67年も前にスプリングモーター(ゼンマイ)でそれを達成していたのだ。もっとも35mmフルサイズの24×36mmを巻き上げるのはしんどいので、24×24mmのいわゆるロボット判としていた。ローヤルは1953年に発表された距離計連動機で、ロボット判の24×24mmのフルサイズの36がある。初めは1枚ずつ指を離して巻き上げたが、Sは連続撮影も可能。いっぽいに巻き上げておくと最大15枚の連続撮影ができる。

## ●カメラベーゼ2002年の主なスケジュール (H.Schmidt氏主催の市)

日付	開催都市	住所
2002年1月19日(土)	DORTMUND ドルトムント	13.Kameraberoese/Stadtwerksaal/Von-den-Berkenstrasse
2002年1月20日(日)	BREMEN ブレーメン	51.Intern.Kameraberoese/Konsul-Hackfeld-Haus/Birkenstr.34
2002年1月26日(土)	KOELN ケルン	11.Intern.Kameraberoese/KOMED-Saal/Im Mediapark 7
2002年2月10日(日)	HAMBURG ハンブルグ	53.Intern.Kameraberoese/Handwerkskammer/Holstenwall 12
2002年2月17日(日)	HANNOVER ハノーバー	43.Intern.Kameraberoese/Wuelfeler B.G./Hildesheimer Str.380
2002年3月9日(土)	BONN ボン	23.Kameraberoese/Brueckenforum-Beuel/Kennedybruecke
2002年4月6日(土)	OSNABRUECK オスナブルック	33.Kameraberoese/Stadthalle/Schlosswall 1-9
2002年4月7日(日)	BREMEN ブレーメン	52.Intern.Kameraberoese/Konsul-Hackfeld-Haus/Birkenstr.34
2002年4月20日(土)	DORTMUND ドルトムント	14.Kameraberoese/Stadtwerksaal/Von-den-Berkenstrasse
2002年4月27日(土)	LEIPZIG ライプツィヒ	20.Kameraberoese/Kulturhaus/Elsterstrasse 35
2002年4月28日(日)	BERLIN ベルリン	27.Intern.Kameraberoese/Longenhaus-Wilmersd./Emser Str.12-13
2002年5月4日(土)	BIELEFELD ビーレフェルト	21.Kameraberoese/Ravensberger Spinnerei/Bleichstrasse
2002年5月5日(日)	HANNOVER ハノーバー	44.Intern.Kameraberoese/Wuelfeler B.G./Hildesheimer Str.380
2002年5月25日(土)	KIEL キール	29.Kameraberoese/Legiensaal im Legienhof/Legienstr.22
2002年5月26日(日)	HAMBURG ハンブルグ	54.Intern.Kameraberoese/Handwerkskammer/Holstenwall 12
2002年10月26日(土)	KOELN ケルン	2.Intern.Kameraberoese/KOMED-Saal/Im Mediapark 7

# カメラベーゼには珍しい カメラが溢れている

一般にクラシックカメラは有史以来1950年代までに作られたものとしてよいだろう。なぜなら1960年代に入ると運動露出計を内蔵したいわゆるAEカメラが急速に普及して、自動化が進むからである。このあいだにドイツのみならず仏、英、米、伊、日、スウェーデン、旧ソ連、中国をはじめとして世界の各国でカメラが作られている。しかしわざとクラシックカメラの全盛期に当たる1920年代から1950年代まで、質量の両面で主導権を握ったのはやはりドイツであった。

日本ではクラシックカメラというとライカだけがひとり勝ちの観があるが、カメラのブランドやモデルは文字どおり数え切れないのであり、ほかにもまだ面白いものが山のようにある。しかし日本の中古カメラ店は売れ足が遅ければショーケースの棚を占領する上に金利が嵩むだけだから、売れ筋のものしか買ってこない。勢いどこの店を覗いても、中古カメラ市などのショーケースを見て、似たり寄ったりのカメラが並んでいて、変わ



**LEICA M2** ズマロン35mm、F2.8、MRメーター付き  
■現地価格 DM3480(約21万円)  
■日本での相場価格 35万円



**LEICA III F** エルマー50mm、F3.5付き  
■現地価格 DM2500(約15万円)  
■日本での相場価格 20万円

もっとも好ましいバルナック・ライカがこの値段で買えるなんて!

スクリューライカの最終モデルはM3以降に発表された1957-1970年のIII Gだが、数が少なく好事家に秘蔵されるケースが多い。ゆえにひとつ前の1950-1957年のIII Fこそ究極のバルナック・ライカと言う人も少くない。III Fはシャッターにフラッシュのためのシンクロがついた最初のライカで、そのためのコンタクトナンバーを選ぶ数字の色によって初期のブラックシンクロと後期のレッドシンクロに分かれられる。これは後者で、しかもセルフタイマーのついたもっとも望ましいモデル。状態も抜群だ。



**LEICA M5** ライカ M5 箱入りボディ  
■現地価格 DM4000(約24万円)  
■日本での相場価格 35万円

M5は失敗作だなんて、使ったことのないヤツの言うことだ!

1975年の比較的短期間に3万3000台余りを生産したに終わった(ちなみにM3は21万台に近い!)。しかし実際には大ぶりなボディが持ちやすく、操作もしやすい非常に使いよいカメラで、いまごろ人気が高まっている。ブレーメンに出ていたのは箱入りのクロームの新品のようなボディであった。



**LEICA II** ライカ II エルマー50mm、F3.5付き  
■現地価格 DM800(約4万8000円)  
■日本での相場価格 8万円

よく使い込まれた完動のII型ならこんな値段で手に入る!

ライカは初めて運動距離計を持たず、アクセサリーの単独距離計で被写体までの距離を測り、レンズの距離スケールに動かして撮影していた。この不便さを解消するためにボディの軍艦部に距離計を組み込みレンズと運動させたのがII型で、1932年2月最初のコンタックスに1ヵ月先駆けて発表された。これによりライカの速写性は格段に高まり、キャンディッドフォトやプレスフォトに威力を發揮するようになった。これはブレーメンのベーゼで見た黒のII型で、ほどよく使い込まれた、好ましいものであった。

り映えがしない。例えば第二次大戦後から1950年代末に日本製カメラに駆逐されるまでの西ドイツや東ドイツには、無数の大衆的なレンズシャッターの35mmカメラがあり、なかには、なかなか興味深いものも少なくない。しかしそれらは日本では知名度が低く、しかも安価で利益率が低いので滅多に入ってこない。ところがドイツのフォトベーゼを見けば、そうした未知のカメラが山のように積まれ、カメラ購入の選択肢は何倍にも広がるのである。

もしあなたが古いカメラに興味があり、ドイツを旅することがあつたら、フォトベーゼないしはカメラベーゼを覗くことを強くおすすめする。ドイツのちょっと大きめの書店やカメラ店へ行くと、"Foto-Deutsche"という季刊の中古カメラ誌が置いてある。それをながめるとテルミンカレンダーというページがあり、いつ、どの街のなんという会場でカメラのベーゼが開かれているか出ている。もし日程が合つたら訪れるべし。200~300マルクもあれば、珍しく楽しいカメラがゲットできるはずだ!

**INOS II** イノス II スコナー105mm、F4.5付き  
■現地価格 DM225(約1万3000円)  
■日本での相場価格 5万円

私より年上の新品同様の名機がたったの1万3000円で買った

私のコレクションにはなかったので、いつか手に入れたいと念じていた名門フォクトレンダーの"イノス II型"に、遂にブレーメンのカメラベーゼで巡り合えた。すでに65年も前のカメラだが、機能も外観も新品状態で、まったく手を入れることなくそのまま使えた。実際その後の旅先で試写したが、結果はカラーでもバッチャリであった。その上6×4.5cmのセミ判を撮るマスク(これだけでも日本では数千円はする!)や、珍しい完成時のレンズやボディのチェックリスト(サイン入り)までついている。レンズは最高級のヘリアではなく、3群4枚テッサー・タイプのスコナーだが、このクオリティだったら日本では5万円を下らないだろう。ところが店の言い値は225マルク、値引交渉するとなかなか渋かったがそれでも200マルクにしてくれた。約1万2000円である。程度のよい名機を安価で入手できる、これこそ醍醐味である。



## カメラベーゼでよい買物をするためのノウハウ



**SUPER SEMI IKONTA IV**

▲スーパーセミイコントA型  
テッサー75mm、F3.5付き

■現地価格 DM1800(約11万円)

■日本での相場価格 18万円

蛇腹をバカにしてはならない。機能も性能も価格も最高級だ!

薄くたためるのでコートのポケットに入る一方、ボタンを押せばバネでバタバタと蛇腹が組み上がり、即撮影態勢に入れる軽快なカメラがスプリングカメラだ。近代的なスプリングカメラは1929年、ツァイス・イコン社で誕生、大ヒット。そのためドイツ国内ばかりでなく、日本を含む世界各国でコピーが作られた。結果的に1930年代から1950年代末まで、イコンタ型スプリングカメラはライカ型35mmカメラやローライ型二眼レフと人気を三分することになる。さらに1934年、ツァイス・イコン社はレンズの前玉回転と連動するドレーカイル(回転式楔形プリズム)という画期的な方法で、スプリングカメラでは不可能とされた距離計連動を達成。それがスーパーイコントで、携帯性がよい上によく写るので山岳写真家などに愛用者が多い。これは6×4.5cmのセミ判で、戦後の西ドイツ製だがレンズだけは東へ行ったカール・ツァイス・イエナのツッサーだ。



►ゾディアック 30mm、  
F3.5付

**ZÖANAK-S**

■現地価格 DM300(約1万8000円)

■日本での相場価格 2万9000円

旧ソ連製の魚眼レンズはペンタコン・シックスにもコンパチブルなのだ

最近魚眼レンズに凝っているという同行の千葉允カメラマンがブレーメンのベーゼで掘り出した旧ソ連製魚眼レンズ。実はこのレンズ、1971年から1990年代までウクライナのキエフで生産されたキエフ6Cないし6Dという6×6cm判一眼レフ用として作られたもの。ところがキエフ6Cは東ドイツのペンタコン人民公社が1967年から生産したペンタコン・シックスを下敷きにしたもので、レンズマウントが共通。ペンタコン・シックスのオーナー、ユーザーでもある千葉さんは早速飛びついた。だってペンタコン純正レンズはとても高価なんです。



**ZENIT 6**

▲ゼニット 6 ルビン1 37-80mm、F2.8ズームレンズ付き

■現地価格 DM450(約2万7000円)

■日本での相場価格 4万5000円

カメラベーゼには旧共産圏の東欧の珍種もよく顔を出す

これは私がブレーメンで発掘した旧ソビエト連邦クラスノゴルスクのKMZ工場製35mm一眼レフ、ゼニット6型だ。ゼニットは種類も生産量も非常に多いが、この6型は1964-1968年に9000台足らずが作られた珍品。何が珍しいかといえば、ついているルビン1tsというF2.8、37-80mmズームレンズが西ドイツ、フオクトレンダー社のベッサマティック、ウルトラマティック用のF2.8、36-82mmズームーのコピーだという点である。旧ソ連には日本を含めた西側のカメラのコピーがたくさんあるが、このレンズは稀少。ボディ自体もベッサマティックなどをコピーしたデッケル・マウントだが、「ベッサマティックのレンズはこのボディにつくが、このレンズはベッサマティックにはつかない」と店のおやじが教えてくれた。ペンタプリズムがなかったので390マルクに負けさせた。

**VITESSA L**  
■現地価格 DM680(約4万円)  
■日本での相場価格 7万5000円

世界中どこへ行っても面白いカメラはやっぱり高価で取り引きされる。

形が美しく、構造の凝った面白いカメラを欲するのは世界共通の人情というものだろう。フォクトレンダーのヴィテッサがドイツでもことのほか高いことでそれを確認した。ヴィテッサにはバリエーションが多く、レンズも5群6枚でF2のウルトロン、3群4枚でF3.5とF2.8のスコバーの3種がある。ブレーメンで私が手にしているのは、ウルトロン付きでセレン単独露出計を備えたヴィテッサL。これは露出計のフィルム感度が最高ASA200までの最後から2番目のモデルだ。



**ROLLEI 4×4**  
■現地価格 DM1000(6万円)  
■日本での相場価格 18万円

戦後のローライ4×4でもブラックは数が少なく、極めて高価なのだ!

ローライは6×6cm判のほかに、1931年から127フィルムに4×4cm判を撮る可愛らしい二眼レフ“4×4”を生産していた。その戦後版は1957-1963年に作られ、スーパースライドの大流行したアメリカヘベビー・ローライの名で大量に輸出された。しかしコダックが127のベストフィルムの生産をやめ、フィルム難となったため、価格は大暴落した。戦後型はほとんどがグレー塗装、グレー革張りだが、ごく僅かに黒があり、黒はグレーの3倍から5倍も高価である。

# 街なかの中古カメラ店 のほうが信頼度は高い

ドイツでの狙いめはもちろんカメラベーゼだが、それ以外に、信頼できる街の中古カメラ店も少なくない。ベルリン、フランクフルト、ケルン、ミュンヘン、ドレスデンといった大都会にはかなり大規模な中古カメラ店が少なくとも三つや四つはある。

小さな街でも新品カメラやDPEを扱う店の片隅に中古カメラが数台並べられていることは珍しくない。価格はカメラベーゼに比べると幾分高めだが、その代わり店は常設で逃げも隠れもないから商品は信頼できる。ただしここでも相手の言い値どおり

ミュンヘンのセカンドハンド・カメラのプロフィショップ店内のショーケース。あらゆるジャンル、年代のカメラが所狭しと並べられており、レンズや各種のアクセサリーも豊富だ。下の写真はコンタックスとそのアクセサリー類が並んだショーケースの一部でフレクトスコープ（ミラーボックス）につけた180mm、F2.8オリンピア・ジナーなど、マニアには垂涎ものばかりだ。クレジットカードは利くが、キャッシュの即払いのほうが負けやすいようだ。



上はセカンドハンド・カメラのプロフィショップのファサード。入り口の間口は狭いが、店は奥に深く、広い事務所もある。名刺を出すとオーナー夫人に「あなたの名前知っているわ」と言われた。実はこのオーナーが過去に何度も落札したことがあったのだ。

●Second Hand Camera/Klenzestrasse 42 80469 Munchen Germany tel: (+49) 089-23 88 63-60 fax: (+49) 089-23 88 63-80 www.secondhandcamera.de Konopatzky@t-online.de



いで、必ず価格交渉すること。たいてい10%くらいは値引きするし、



バイエルンの州都ミュンヘンの観光名所、新市庁舎のカラクリ時計。BMWの地元でもある。

負けられないときには、アクセサリーの小物をつけてくれたりするからだ。

今回ミュンヘンで訪れたのはオークションで有名なセカンドハンド・カメラの店。ショッピングセンターがあるほか、市内にあと二店あるという。品揃えは豊富で、オークションをやっていることもあって名品も少なくない。私がロボットをゲットしたのもここ。あるという。品揃えは豊富で、オークション

## 特別ツアー企画「高島鎮雄氏と行く、ドイツ・クラシックカメラの旅」募集のご案内

今回、紹介したドイツ・クラシックカメラ大ノミの市を高島鎮雄氏と訪れ、実際に現地でカメラ選びを体験するツアー企画を実施します。

- 日程：2月7日(木)～14日(木) (6泊8日)
- 募集人員：20名限定(最少催行人員10名)
- 利用予定航空会社：日本航空エコノミークラス
- 食事：朝6回 昼なし 夕食1回
- 旅行主催 申込先・問い合わせ先：

東急観光(株) 新宿支店ドイツ・クラシックカメラツアー係

〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-20-2

TEL:03-3340-0620 FAX:03-3340-0628

国土交通大臣登録旅行業第38号

なお、旅行の内容、手続きに関する一切の責任は、すべて主催旅行会社である、東急観光に帰属します。

- 旅行代金：34万6000円(一人部屋追加代金7万2000円)
- 募集期間：2001年12月21日(金)まで
- 利用予定ホテル：メルキュール(ウェツラー)3つ星
- ラディソン・サス(ハンブルグ)4つ星／デ・フランセ(ウィーン)5つ星
- 添乗員：添乗員は同行いたしませんが、現地ガイドがお世話します。また、高島鎮雄氏がツアーコーディネーターとして同行いたします。



### ■スケジュール

- 2月7日(木)：成田発、ドイツ・フランクフルトへ。バスにてウェツラーへ
  - 2月8日(金)：ライカ本社工場見学(ライカアカデミー受講、ライカより修了証の授与、昼食は社員食堂にて)
  - 2月9日(土)：バスにてハンブルグへ
  - 2月10日(日)：高島氏のアドバイスを受け、クラシックカメラ大ノミの市見学
  - 2月11日(月)：航空機にてウィーンへ。世界最大の中古ライカショップと同博物館を訪問
  - 2月12日(火)：終日、自由行動。高島氏を囲んでの夕食会
  - 2月13日(水)：出発まで自由行動。航空機にてフランクフルトへ。
  - 2月14日(木)：成田空港到着後解散
- 運輸機関、現地の事情により日程、利用機関が変更になる場合があります。

ドイツ人気4大ブランドのクラシックカメラは、ここに注意してゲットしよう！

# クラシックカメラの目利きに学ぶ バイヤーズ・チェックポイント

ドイツでは安いとはいっても、カメラはやはり高価な買い物だ。しかも極めて複雑な機械だから、外観がきれいだからといって飛びつくと、とんでもない厄介者を背負い込むことになる。そうならないためにはどこをチェックすればいいのだろう？

## LEICA M3

ライカ M3

シャッターは正確に、  
スムーズに作動しているか？

裏蓋を開け、レンズを光の方向にかざしながら、シャッターが全速度で正しく作動するか後ろから目視で確認する。同時に巻き上げ時に先幕と後幕が完全に閉じたままであるか確かめる。ガバナーの音は静かで澄んでいるか？

トップカバー やボトムカバーに大きな傷はないか？

機能優先といつても、外観もきれいなのにこしたことはない。（リセールバリューにも影響する）。大きな凹みは内部構造に衝撃や歪みを与えている危険性があるので避けたい。露出計装着やストラップ取り付けの傷は大丈夫。

セルフタイマーは正しく  
働いているだろうか？

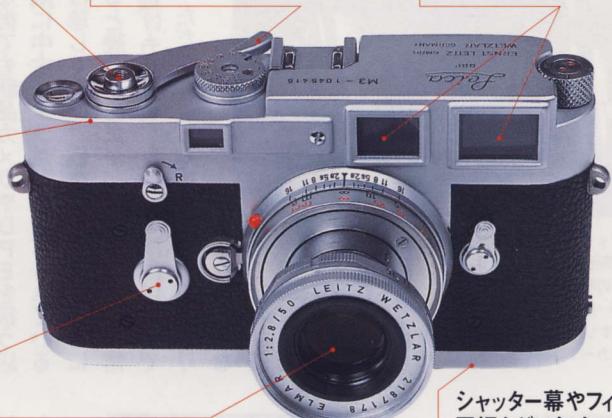
M3のセルフタイマーはセットレバーを真下まで回し、あとに現れる小さなボタンを押すと、ほぼ10秒後にシャッターが切れる。90度（左真横）では4秒だ。セルフタイマーが正確かつスムーズに作動するか否かをチェック。

ライカ初のレバー巻き上げは  
スムーズに作動するか？

No.700,000からの初期型はダブルストローク（2回巻き）で、1958年のNo.919,251からシングルストロークになる。巻き上げがスムーズで、重さが変化したり、引っかかったりしないこと。テストフィルムを装填して試す。

最大の特徴たるファインダー  
はきれいで機能するか？

ファインダー像にクモリやカレ（接着不良によるいわゆるバルサム切れ）がないか？ 無限遠で距離計像が一致するか？ レンズ交換によりライトフレーム（写る範囲を示す光の枠）はきちんと出るか、前面のレバーで確認。



レンズのキズやカビ、クモリを  
詳細にチェックしたい

レンズを外し、絞りを開放にして光にかざし両面からチェック。大きな傷、カビ（およびカビ跡）、クモリ（バルサム切れの危険性あり）、コーティングのムラのあるものは避ける。焦点調節のヘリコイドにガタがないか、スムーズに回るかチェック。

シャッター幕やフィルムの  
圧板などに気をつけよう

一眼レフでない布幕フォーカルプレーンは太陽光による焼損事故を起こしやすいので、幕を光源に向けてレンズを覗いてチェック。この際シャッターを切る前（先幕）と後（後幕）の両方を忘れない。フィルム圧板の傷は避ける。

## LEICA III f

ライカ III f

巻き上げは軽くスムーズか、  
カウンターは作動するか？

M3でレバー巻き上げになる以前のライカ使いのなかには、右手人差し指の横腹で一気にノブを巻く強者もいた。よく調節された巻き上げはスムーズで軽い。ゴリゴリとするものは要注意。フィルムカウンターは手で1に戻す方式。

スクリュー・ライカの  
シャッターは作動音で調べる

この型は裏蓋が開かないで、レンズを外して前から目で確認するしかない。同時にカメラに耳を近づけ、ムラがなく、軽く澄んだ音がするか調べる。幕はテスト撮影しなければわからない。幕の交換や調整は高価だが可能だ。

距離計は正確か、ピュー  
ファインダーはクリアか？

ファインダーはこのタイプのカメラの命だ。左の窓の距離計はレンズの無限遠位置で遠景の二重像が合致するか（左右ばかりでなく上下も）？ 右の透視ファインダーはゴミやホコリ、クモリがなく、クリアに見えるかチェック。



レンズに傷は  
ないか？ 沈胴には  
ガタはないか？

レンズのチェックはM3の場合と変わりはない。スクリュー・ライカの標準レンズには短く格納できる沈胴式のものが多いが、ガタの有無をチェックしたい。また焦点調節用のヘリコイドがスムーズに回るかも…。

シャッターの使い方を  
よく勉強し、慣れておくこと

この型のシャッターは上面に高速ダイアル、前面に低速ダイアルがある2軸式。高速優先式で低速時には高速ダイアルを30-1に合わせた後、低速ダイアルのロックを外して速度を選ぶ。高速時には低速ダイアルを30に合わせる。

革張りはしっかりしているか？ ヒビ割れは？

ライカの革はよく合成ゴムだといわれるが、これは大きな間違い。実はグッタペルカと呼ばれる杜仲の樹液から作られた天然ゴムの一種だ。古くなると硬化してヒビ割れたり、剥落して中古価格が下がってしまう。

ボディとレンズの年代は揃っているのが望ましい

世界中で多数のライカ・コピーが作られたので、巷にはスクリューマウントのレンズが溢れている。それを次々と試してみるのもライカの楽しみのひとつだが、最初の一一台は年代の合った純正レンズにすべきだろう。

## LEICA

ライカ

ライカが偉いのは、機械が優れているからばかりでなく、その高い機動性によってキャンドイツドフォト（そのままを撮る写真）という新しい写真の考え方をもたらしたからである。だからライカはしまい込むコレクションカメラにしないで、どんどん使うべきだ。ライカはどんなに古いモデルでも、丁寧に使われ、よく手入れされたものならいまでもきれいな写真が撮れる。使うことを前提にするなら外

観のきれいさよりも、レンズやファインダーのきれいか、機械の調子の良さを選ぶべきだ。ライカにはレンズ交換マウントにより、スクリュー式（設計者にちなんでバルナック・ライカとも呼ぶ）とバヨネット式（いわゆるMライカ）の2種類がある。他社製を含めて膨大な数にのぼるスクリューレンズは、アダプターを介してMライカにも使えるが、Mレンズをスクリュー・ライカに使うことはできない。

### ■おすすめライカ

1 M3（1954-1968年） 技術的にも資金的にも絶頂期のM型で、品質も最高。

2 III f（1950-1956年） 最後から2番目のスクリュー・ライカで数多く求めやすい。

3 M5（1971-1975年） 露出計の入った最初のライカ。使いやすくいまや貴重品。

4 III g（1957-1966年） M3に近いファインダーを持つ最後のスクリュー・ライカ。

5 IA（1925-1933年） 距離計のない最初のライカ。いまも完全に実用になる。

# ROLLEI 35

ローライ 35

## CdSの連動露出計の針は元気よく動いているか？

CdS露出計はいわゆる追針式の連動タイプで、振れた白い針にシャッターまたは絞りを調節してオレンジの針を合わせれば適正露出となる。たいいてのお店は標準的な光源を決めて露出レベルをチェックしているので頼む。

## レンズを沈胴するときにロックを外すボタンは働くか？

よくシャッターボタンと間違える人がいるが、シャッターは向かって左隣。これはレンズを沈胴するときにロックを外すボタンだ。レンズはシャッターを巻き上げた状態でないと沈胴できない。無理をすると壊れるので注意。

## フィルム感度設定ダイアルと絞りダイアルの作動は？

このダイアルで予めASA(現在のISO)またはDINの感度を合わせておかなければならぬ。感度を変えて針の動きをチェックしよう。絞りは下側のロックを押し上げて回すので、絞り優先となる。電池は水銀のHDなのでアダプターが必要だ。



## 巻き上げレバーはスムーズで、自動的に元に戻るか？

ローライ35ではコンパクトにするためにフィルムの給送が普通と逆で、巻き上げレバーも左手操作となる。顔から離さないと巻き上げられないのが唯一の欠点だ。レバーの作動にムラがなく、スムーズに元に戻るか確認。

## ファインダー像はクリアで、ゴミやホコリはないか？

大型のアルバダ式ビューファインダーは明るく見やすいか？写る範囲を示すプライフレームに途切れはないか？ファインダーはドイツ製シリガポール製のほうがクリアなほどで、写りもほとんど差はなく、お買い得。

# ROLLEIFLEX

ローライフレックス

## シャッターや絞りは軽くスムーズにセットできるか？

シャッター速度は上下レンズ間左のホイール、絞りは右のホイールで選択する。シャッター速度と絞り値は、上のビューレンズの上にある小さな窓に出る。シャッター、絞りのホイールが軽くスムーズに回るか否かをチェック。

## 巻き上げは1枚目から確実にストップするだろうか？

ローライフレックス・オートマットの最大の特徴は、フィルムを装填して巻いてゆくと1枚めから自動的に止まること。実際にテスト用のフィルムを入れて確認しよう。巻き上げレバーは、元に戻さないとシャッターが切れない。

## 撮影レンズのキズ、クモリ、ホコリなどをチェックする

2.8F(ニーハチエフ)のレンズにはカール・ツァイス製のブランーランド・シナイダーランド製のクセノタルの2種があり、前者のほうが人気も中古価格もぐんと高い。しかし実力は伯仲で、キズやクモリ、ホコリのないほうを選びたい。

## ルーペやミラー、ピントグラスはクリーンか？

ピントグラス上のファインダー映像を拡大するルーペや、アイレベルで見るためのミラーにキズはないか、正しい位置にセットできるかをチェック。プラスチックのピント板は交換できるのでキズがつきやすいから厳重に調べる。

## ピントフードはしっかりとしていて、スムーズか？

二眼レフのピントフードは開けると大きくかさばるのでぶつけやすい。ツブレやキズがないか、スムーズにたためるかチェック。この時代以降のローライのフードは、左右両側面を軽くつまむことによってワンタッチでしまえる便利なシステムだ。



## 革張りはしっかりとっているか、剥した跡はないか？

ローライフレックスの張り革は本物の牛革。よく剥れかかったものを見かけるので要注意。意図的に剥した跡のあるものは修理をしたとの証拠だ。2.8Fの生産終了からすでに20年、オーバーホールはやむを得まい。

## セレンの単独露出計は生きているかチェックしよう

2.8Fにはセレンの単独露出計が内蔵されている。ネームプレートの下半分に受光部があり、追針式のメーター部は繰り出しほに内蔵されている。露出計なしでも使えるが、元気に針が振れているほうがうれしい！

## ■おすすめローライ

- 1 ローライフレックス2.8F 性能的にも品質的にも頂点を極めた二眼レフの王者。
- 2 ローライ35 コンパクトカメラというジャンルを拓き、ハーフサイズを駆逐した。
- 3 ローライフレックス4×4 127フィルムに4×4cm判を撮る可愛らしいベビー。
- 4 ローライコードV コードはつねにフレックスの普及型だが、安価で使いやすい。
- 5 ワイド・ローライ 極めて数が少なく、高価な好事家向けワイド専用二眼レフ。

# 一眼レフの王者にして、コンパクトの創設者

# ROLLEI

ローライ

ローライは名門フォクトレンダーから独立して1920年に発足した会社。初めは三眼レフ型のステレオカメラを作っていたが、そのローラルフィルム専用機ローライドスコープをモノクロ写真用に改造し、1929年にローライフレックスを発表。1930年にいつたん消滅した木製大型一眼レフを、近代的な全金属製精密カメラとして蘇らせた。30年代から'50年代なかごろまで、一眼レフはライカ型35mmカメラやスプリングカメラと並び立ったが、つねに

その頂点にいたのがローライフレックスだ。いまとなつては大きく重いが、じつくりと作画するにはうつてつけの名機だ。またローライは愛玩用と呼びたくなるような一連の珠玉のような小型カメラでも人気を博した。なかでも不世出の設計家ハインツ・ヴァースケにより1966年に世に出たローライ35は、各型を含めて15年間に200万台近くも生産するヒットとなる。ハーフサイズに近いがフィルムはフルサイズで、コンパクトカメラのパイオニアとなつた。

